

恋愛映画

Romantic Movies

*Pretty Woman Sea of Love Moonstruck
When Harry Met Sally September Affair Sleeping with the Enemy
Falling in Love Love in the Afternoon
Nine 1/2 weeks Manhattan*

鎌田敏夫

新潮社

恋愛映画

れん あい えい が かまた とし お
恋愛映画 鎌田敏夫



発行 1991.12.5

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社 〒162 東京都新宿区矢来町71 振替東京4-808

TEL〈業務部〉03・3266・5111 〈編集部〉03・3266・5411

印刷所 三晃印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

©Toshio Kamata 1991, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが 小社通信係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替え致します。

ISBN4-10-383001-8 C0093

価格はカバーに表示してあります。

恋愛映画

Contents

ブリティ・ウーマン	7
シー・オブ・ラブ	31
月の輝く夜に	51
恋人たちの予感	75
旅愁	103
愛がこわれるとき	123
恋におちて	143
昼下りの情事	161
ナインハーフ	187
マンハッタン	207

Romantic Movies

Scene # 1 ——— *Pretty Woman*

Scene # 2 ——— *Sea of Love*

Scene # 3 ——— *Moonstruck*

Scene # 4 ——— *When Harry Met Sally*

Scene # 5 ——— *September Affair*

Scene # 6 ——— *Sleeping with the Enemy*

Scene # 7 ——— *Falling in Love*

Scene # 8 ——— *Love in the Afternoon*

Scene # 9 ——— *Nine 1/2 weeks*

Scene # 10 ——— *Manhattan*

表紙写真



LORENZO MAZZEGA
CARLOS MUNOZ YAGUE

恋愛映画

Scene # 1

プリティ・ウーマン

Pretty Woman

「話って、何？」

「加奈子のこと、あきらめてあげて欲しいんです」

「え？」

「加奈子、結婚することになったんです……ちゃんと話しないといけないって、彼女も思いながら、なかなか言い出せなくて……私、気持ちを伝えてくれて、加奈子に頼まれてきたんです」

「加奈子って、誰？」

「え？」

「知らないよ、加奈子さんなんて」

「あの……小島さんじゃないんですか？」

「ぼくは、森川直文」

「え!？」

「小島って、うちの事務所にいる小島かな……」

「K&M設計事務所って?」

「うちの事務所……小島は、うちのスタッフなんだ」

「……………」

「おれ、小島に、『ブリティ・ウーマン』の指定席の切符が余ってるけど行きませんでした言われて、来たんだけど」

「……………」

「映画が終わったら、隣の席のきみが、お話がありますって突然声をかけてくるから……」

「……………」

「映画を見ている間中、きみは、おれの方をチラチラ見てただろう?」

「私、加奈子に頼まれてきたんだけど、どう言い出していいか分からなくて、映画どころじゃなかったんです」

「隣の美人が、チラチラ見るから、おれって、そんなにいい男かなって思ったりして……映画が終わったとたんに、その女性に誘われて、今日は、何ていい日なんだろうって……」

「ふざけないでください」

「ふざけてなんかいいよ」

「不思議に思ったのなら、ここのレストランに来るまでに、何ですかって聞けばいいじゃないですか」

「だって、きみが、どんどん歩いていくから……きれいな脚をしてる人だなあって」

「余計なこと言わないでください！」

「そんなに怒るなよ……間違えたのは、きみの方だよ」

「……………」

「きみだって、おれをレストランに誘うまでに、ひとこと、小島さんですかって確かめればいいじゃないか」

「私は、代わりに行ってって、加奈子に指定席の券をもらってきたんです。右隣に座った人が小島さんだからって」

「普通なら、ひとこと確かめるぜ」

「……………」

「普段でも、そそっかしいの、きみは？」

「……………」

「美人でそそっかしいのって、おれ、大好きなんだ」

「私は美人じゃありません」

「美人っていうのは、自分で決めるんじゃない。人が決めるんだよ」

「私、帰ります」

「どうして？」

「だって、あなたは小島さんじゃないし……お話することもないから」

「だって、料理、注文しちゃったじゃないか」

「……………」

「いいレストランだね、ここ……よく来るの？」

「いえ……小島さんに、つらいお話をしないといけないって思ったものですから」

「せめてムードだけでも、いいところと思って……」

「ええ」

「カップルばかりじゃない？」

「それがどうかしましたか」

「きみとおれも恋人同士に見えるかな」

「見えません」

「そんなに怖い顔をするなよ」

「あなたが余計なことばかり言うから……」

「余計なことって？」

「美人だの、脚がきれいだの……恋人同士だの」

「おれは、感想を述べているだけだよ」

「私は、そんな話をしにきたわけじゃありませんから」

「加奈子さんって、小島の恋人なの？」

「ええ」

「そうか……やつは振られかけてるのか、恋人に……道理で、このところ元気がないと思ってたよ……分かった。小島に伝えておくよ。加奈子さんをあきらめろって」

「そんな簡単なことじゃないんです。だから、私、来たんです」

「あきらめないと仕方ないじゃないか。結婚するんだろう、加奈子さんは？」

「……………」

「小島も、彼女の気持ちが自分になくなったことは分かっているよ……おれに指定席の券をくれたのだって、彼女が来ないと思ったからなんだろう？」

「加奈子、行けないって返事をしたんです……でも、小島さんが、どうしても、もう一度だけ映画と一緒に見たいって言うから」

「未練がましいやつだな」

「加奈子と小島さんって、よく二人で映画を見てたらしいんです」

「きみは、映画好き？」

「私の話をしてるんじゃないやありません」

「聞いてもいいだろう？」

「聞かないでください」

「面白かったね、『プリティ・ウーマン』」

「そうですね……」

「リチャード・ギアがなかなかカッコイイ……きみが、おれの顔をチラチラ見るだろ。スクリーンにはリチャード・ギアが映ってるし……あんなのとおれを比較されたらかなわないって思ってた」

「比較なんかしてません（笑）……私、加奈子が好きになった人って、こんな人だったのかなって思ってたんです」

「なんて変な男。加奈子も趣味が悪いわねって」

「そんなじゃありません」

「どう思った、正直に言って？」

「……………」

「おっしゃってください、なんとでも（笑）」

「この人を振るのは、ちょっと、もったいないかなって思っていました、正直に言って」

「ほんと!？」

「スープが袖につきます」

「あ……」

「そっかしいんですね」

「きみほどじゃないけどね」

「……………」

「いい色のワンピースだね」

「ツープースです」

「……………」

「ここで分かれてるんです……立ち上がって、のぞかないでください（笑）」

「モスグリーン？」

「ちょっと暗めの……」

「渋いね……でも、美人が渋目の洋服を着ていると、顔が引き立つ」

「美人美人って、言わないでください」

「美人だから、そう言ってるんだよ」

「美人を見たことがないんじゃないですか（笑）」

「ハハハハ……このところ近々とは見たことがなかったな……ずっと、建築現場に通っていたから」

「設計事務所をやってらっしゃるんですか？」

「友達とね……同じ建築事務所にしたやつとね、二年前に独立したんだ」

「家を建てるって、夢のあるお仕事ですね」

「夢を見てるヒマはないんだよ、実際には……施工主を説得するのは大変……施工業者を捕まえるのも大変……大変の間でウロウロしているのが、建築家なんだ（笑）」